

街の人に元気を与える パンを届けたい。

新潟教会 齋藤享志さん

齋藤享志さんは、大学卒業後に都内の老舗和菓子店に就職、製パン部に配属され、パンづくりの技術と自信を深めていった。36歳の時に独立し(有)大元堂製パンを構え、宅配ピザの経営にも乗りだした。しかし、当初の目論みははずれて売上げは伸びずに借金がかさんだ。ついには、ベーカリーを切り盛りしていた妻と、従業員の気持ちが離れてしまう。そのときやっと傲慢だった自分に気づく。「俺は腕が立つから、もっと儲けられる——という驕りと欲にとらわれていました。夫婦と店の危機に直面して、原点に返ろうと心が定まりました」そう決意した齋藤さんはピザ店を閉め、地元の企業や学校へ飛び込みで営業をかける。やがて地道な努力が実を結び、学校やホテルなどの顧客を獲得する。「家族や従業員が力を合わせて売ってくれるおかげで、私はパンを焼かせてもらえる、と分らせていただきました」そういって照れ笑いを浮かべる齋藤さん。今やその情熱は、おいしいパンづくりに注ぎ込まれ、お客さんの笑顔を引き出している。



与える喜び

私たち人間は本能的に、欲望を満たすこと以上の幸せや喜びを感じ受^{かんじゅ}する能力が具わ^{そな}っているようです。その感性がはたらくスイッチは何かといえば、人の喜ぶ顔や姿です。ある方が、地域の施設で開かれた敬老の日の集まりに贈り物をもって出かけたところ、二人のお年寄りから「知らない人から物はいただけない」といわれたそうです。そこでその方は「ご長寿にあやかりたいので、せめて私の頭を撫でていただけますか」とお願いしました。すると、そのお年寄りは髪の毛がぼさぼさになるほど頭を撫^なでてくださったそうです。あらためてそのお礼にと先の贈り物を差しだすと、今度は満面の笑みを浮かべて「ありがとう」といい、受けとってくださいました。人から一方的に何かをしてもう喜びより、だれかに何かを与える喜びのほうが大きいことを示すとともに、自分の行為が人の幸福や喜びにつながる時、それは生きがいにも通じることを思わせるエピソードです。

立正佼成会